

道徳科を要としたつながりのある道徳教育

～児童生徒のメタ認知に関わる力を生かして～

道徳研究会議

研究員 内島 史章 (川崎市立東小倉小学校)

日野 絵理奈 (川崎市立千代ヶ丘小学校)

関 真由美 (川崎市立渡田中学校)

東江 大介 (川崎市立南加瀬中学校)

指導主事 岡部 啓子

I 主題設定の理由

道徳教育と特別の教科 道徳（以下道徳科）は、児童生徒のよりよく生きるための道徳性を養うことを目標にしている。道徳性を養うことは、育成をめざす資質・能力の三つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等の涵養」と特に関連している。この柱について、小学校（中学校）学習指導要領総則では「児童（生徒）の情意や態度等に関わるものであることから、他の二つの柱以上に、児童生徒や学校の実態を踏まえて指導のねらいを設定していくことが重要となる。」と示されている。

道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものである。これまでも道徳教育の重要性は示されており、「我が国の学校教育の特徴として、各教科等の指導を含めて学校の教育活動全体を通して情意や態度等に関わる資質・能力を育んできたことを挙げることができる」と総則に示されている。やがて大人になる児童生徒が、道徳的行為の実践の場である学校教育の中で、学んだことの意義を実感しながら道徳的な行為を積み重ねていくことの重要性が再認識できる。そこで、本研究会議では、児童生徒の情意や態度等を育んでいくために必要な力として示されている「自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等(中略)、自己の思考や行動を客観的に把握し、認識する、いわゆる『メタ認知』に関わる力」に着目した。これらは、人間性に関するものも含め、一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓く重要な力として示されている。

昨年度の研究会議では、教育活動と道徳科を意図的・計画的に関連付けることで、児童生徒が道徳的価値の大切さや意義を理解して自分の考えを再構築していく姿を見取ることができた。教員間の共通理解のもとマネジメントすることで、教育活動の向上を図ることができた。今年度はさらに児童生徒自身が学んだことの意義を実感できるよう、メタ認知に関わる力を生かしていく。道徳科を要としてつながりのある道徳教育を通して道徳性を養う取組について研究を進めていくため、本研究主題を設定した。

II 研究の内容

2 研究の方法

(1) 見通しをもつための道徳科を要とした関連図の作成と

PDCA サイクル

昨年度の研究を生かし、学校の道徳教育の重点目標に照らし合わせて、関連する教育活動を設定する(図1)。学校や学年でめざす児童生徒像を共通理解し、関連する教育活動でどんな学びができるのかを考える。この作業がプラン(計画)となり、PDCAサイクルのスタートとなる。その際、単に内容項目をつなげるのではなく、道徳科の学びを生かすために、より効果的な順で構成することが求められる。例えば、児童生徒が共通体験する活動を道徳科の事前・事後のどちらに関連付けるとよ

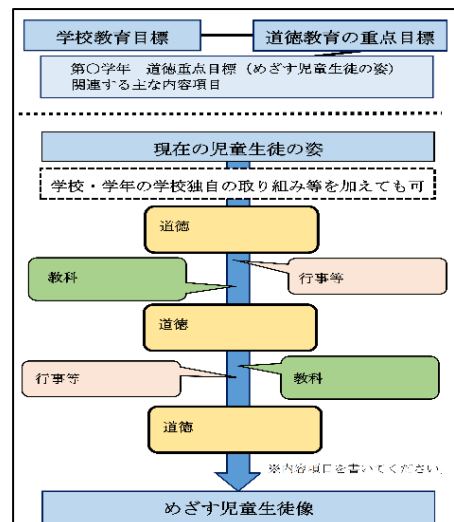


図1 道徳科を要とした他教科等との関連図

り自分ごととして考えられるか、多面的・多角的に考えられるかなどである。また、作成した関連図は、次の教育活動につなげるために、児童生徒の道徳科の学びから常にチェック(評価)、アクション(改善)をしていくことを繰り返していく。このPDCA サイクルを回していくことで、児童生徒の実態に合った教育活動を展開していく。

(2) 道徳科の学びに「児童生徒のメタ認知に関わる力」を生かす

メタ認知について、三宮(2018)は「自分自身や他者の行う認知活動を意識化して、もう一段上からとらえることを意味します。いわば、頭の中において、冷静で客観的な判断をしてくれるもう一人の自分のようなものです。」と述べている。さらにこのメタ認知について、表1のように区分している。

表1 メタ認知的活動の区分と具体例(三宮真知子著「メタ認知で〈学ぶ力〉を高める」)

メタ認知的活動の区分	具体例
①メタ認知的モニタリング 認知についての気づき・予想・点検・評価など	「なんとなくわかっている」 「この質問には簡単に答えられそうだ」 「この解き方でよいのか」 「この部分が理解できていない」
②メタ認知的コントロール 認知についての目標・計画を立てたり、それらを修正したりすること	「完璧に理解しよう」 「簡単などころから始めよう」 「この考え方はうまくいかないから、他の考え方をしてみよう」

表2 特別の教科 道徳 の目標

<p>道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情実践意欲と態度を育てる。</p> <p>※ ()内は、中学校学習指導要領の文言</p>

道徳科の目標には学習活動が明記され(表2)、特に自己の生き方について考えを深める際に、「他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする。それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにする」ことが重要であると小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編に示されている。ここに「自己を深く見つめる」ことと「モニタリング」、「生き方の課題を考えながら自己実現に向けて思いや願いを深める」ことと「コントロール」がつながる。中学校学習指導要領(同)には、「人間についての深い理解と、これを鏡として行為としての自己を深く見つめる」「主体的な判断に基づく適切な行為の選択」とあり、同様に考えることができる。また、道徳科の授業において、教材中の登場人物に自己を投影して考えたり、自分の生活を改めて見つめ直したりすることや、表現活動の一つである役割演技や動作化は、他者の認知活動を意識することに重なる。このように道徳科で行っている学習活動は、メタ認知に関わる力が強く作用していると言える。

自分を俯瞰するイメージがあるメタ認知について、本研究会議では、「モニタリング」と「コントロール」という点に着目し、表1に示されている「モニタリング」「コントロール」と、道徳科・道徳教育の関連について関連を整理した(表3)。関連付ける視点としては、道徳科の目標に示されている学習活動やこれまで道徳科の授業で手立てとしていたものを取り入れた。道徳教育については、教師の関わりから考えられる手立てをまとめた。

道徳科の学びに、「児童生徒のメタ認知に関わる力を生かす」とは、自己投影する道徳的行為に関する体験的な活動や児童生徒が自分自身と向き合える活動を意識した授業展開を考えることとし、その学びを見取り、次の道徳科や教育活動につなげるようにする。

(3) 「モニタリング」「コントロール」生かした「大きくくりな振り返り」を設定する

児童生徒に道徳科と関連させた教育活動を含めた振り返りを昨年度の研究で行ったが、これもメタ認知に関わる力が強く作用している。「モニタリング」と「コントロール」は循環的に働くと考えられているため、この働きを生かすには、活動途中の振り返りも必要となる。そこで、行動や目標の点検や

評価、修正や再計画を考える場を設定する。本研究会では、関連させた教育活動後や活動途中での振り返りを「大きくりな振り返り」と設定する。児童生徒自身が自分の感じ方や考え方を振り返る際の視点を明確にし、自分を客観的に見つめることができる手立てを、発達の段階に応じて考えていく。教師は児童生徒の感じ方や考え方を見取り、次の教育活動につなげていく。

表 3 児童生徒のメタ認知に関わる力と道徳科・道徳教育との関連

	モニタリング	コントロール
道徳科 (学習活動や手立て)	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳的価値に対して、実現している自分、葛藤している自分などを知る。 ・道徳的価値の理解を基にした役割演技や動作化、を通して相手意識を高める。 ・自分の生活を振り返る場面で、これまでの自分の体験やそのときの感じ方、考え方照らし合わせて考える（成功体験や失敗体験など）。 ・他者と対話したり協働したりしながら多様な感じ方、考え方と出会う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の気持ちを考えることと、自分の生活を振り返る（自己の生き方について考える）ことをつなげて考える。 ・できていない自己を見つめるより、これからの自分に生かしたいことを考える振り返りを意識する。
道徳教育 (教師の関わり)	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活において道徳科で学んだことが生かせる場面において、自分の行動等を振り返られるような言葉がけをする。 ・個人や集団の目標を設定し、活動途中や活動後などで振り返る場を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・成功体験や失敗体験、実践途中の行為などを個人内評価し、これからの実践意欲や態度につながる言葉がけをする。 ・活動途中の振り返りをもとに、行動を修正したり更なる目標を設定したりする。

3 検証授業について

(1) 小学校 1 年生 相手意識を高めることができた A さん

① A さんの実態とつながりのある道徳教育の構想

1 年生の発達段階は、他者の立場になって物事を考えることがうまくできず、中学年にかけて他者の認知と自分の認知を区別できるようになると言われている。A さんも自分が一番だという自己中心的な視野をもっており、強く意見を通したり、友達の気持ちを考えられずトラブルになったりすることが多かった。

そこで、1 年生の発達段階でも少しずつ相手意識をもつことが大切だと考え、学年のめざす児童の姿を図 2 のように設定した。

道徳科の授業(表 4)では役割演技を通して、自分勝手な行動への後悔や相手に優しくすることの心地よさを感じ取れるようにした。さらに、自分のことを振り返られるように、登場人物の変容を自分と照らし合わせて考えられるような学習展開を意識した。場面ごとの心情理解を追う展開も考えられるが、今回は、問題解決的な学習の展開を構想し、教材を通して学んだ登場人物の変容と児童自身の変容を重ね合わせられるような展開を考えた。

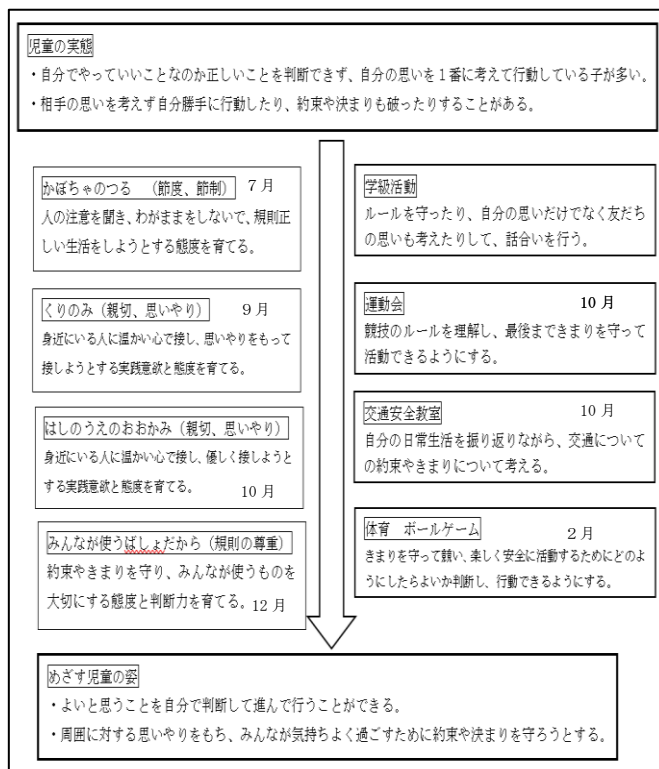


図2 小学校 1 年生の道徳科を要とした他教科等との関連図の一部

表 4 小学校 1 年 道徳科 指導案

主題名	あいてにしんせつに B- (6) <親切, 思いやり>
教材名	「はしのうえのおおかみ」
学習活動	・支援と留意点
1. 「くりのみ」の授業を振り返る。	・内容項目が同じ「くりのみ」の授業を思い出すことで、本時の教材の中での親切な気持ちについて目を向けられるようにする。
2. 教材「はしのうえのおおかみ」を読んで話し合う。	・ハートゲージで板書にも提示することでおおかみの気持ちが変わったことに気付かせる。

○おおかみについて感想はありますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・くまとおおかみが一本橋の上で会った場面で役割演技を行う。いつまでも見送ったあと、くまが考えている言葉をつぶやかせることで、優しい気持ちへ移り変わることを実感できるようにする。
どうしておおかみはやさしくなったのだろう。	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px; display: inline-block;">モニタリング</div>
◎どうしておおかみはやさしくなったのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・本文にはない部分の役割演技を行う。これからのおおかみがどのように行動するか、またその理由を問いながら行うことで、親切にするこのよさに気付くようにする。
3. 自分の生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・おおかみの気持ちの変化と重ねられるように、自分の生活の振り返りをつなく。
○今までに人に親切にしたことはありますか。また、これからはどう過ごしていきたいですか。	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px; display: inline-block;">コントロール</div>
4. 教師の説話を聞く。	

②授業の様子とAさんの変容

授業の中で、Aさんは「ぼくもおおかみみたいに幼稚園の頃は優しくなかったけど、優しくなってきたよ。」とつぶやいていた。教材に出てくるおおかみに自分を照らし合わせることで、自分の生活を振り返りやすくするという、「モニタリング」を生かしたことが有効的だった。授業で登場人物の気持ちやこれからの行動を考えるとという学びを積み重ねることと、道徳教育(図2)として、Aさんが特別活動や他教科での体験の中で成功体験を積み、教師が道徳的行為を価値付けることを大切にすることでAさんに少しずつ変容が見られた。自分の気持ちを優先していたAさんが、友達の気持ちを推測して行動したり、落ち着いて考えて友達に譲ったりすることが増えた。トラブルの際には、お互いにどんな気持ちになるか考えさせ、次からどうすればよいのかを丁寧に聞き取りを行った。相手のことを考えて行動できた際には、「素敵だね」「相手も嬉しそうだよ」と行動を認めていった。大きくくりな振り返りでは、1年生なりに自分のことを振り返り、これからの課題を考えられるように、「道徳の授業で心に残っているものは何か。また、その時の自分と今の自分を比べて感じたことを書く。」という視点で行った(モニタリング、コントロール)。Aさんは、教材「はしのうえのおおかみ」を選び、「最初はおおかみのように意地悪だったけど今は全員に優しくできています。いい気持ちなのでこれからも優しくしたいです。」と自分のことを見つめ直し、メタ認知に関わる力を生かしている様子が見られた。

(2) 小学校5年生 委員会活動に前向きに取り組む姿勢が育ってきたBさん

①Bさんの実態とつながりのある道徳教育の構想

令和2年度のスタートは、5年生にとって学校をよりよくする活動を十分に経験することができなかった。本来であれば、高学年に向けて意欲を高め、高学年ならではの活動にも期待をもちながら進級するはずであった。学校再開後、委員会活動が始まったが、Bさんは面倒な思いが強く、中休みに仕事をするよさを見出せていなかった。7月の道徳科で、「よりよい学校生活、集団生活の充実」の授業を行った際には、話し合いで、学校のためになるという児童の意見が出る中、「委員会をやっても誰も喜んでくれない」「休み時間にやるのは嫌だな」と素直に自分の思いを表出していた(モニタリング)。

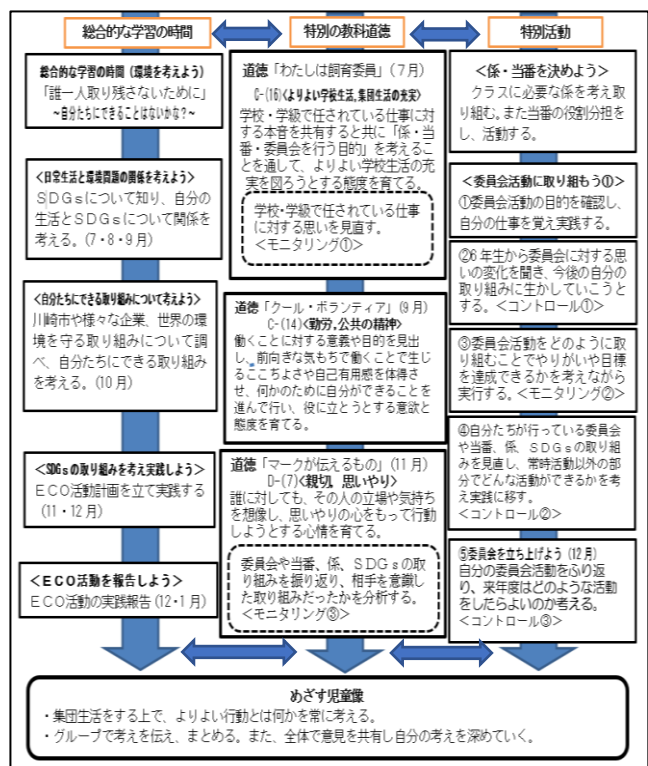


図3 小学校5年生 道徳科を要とした他教科等との関連図の一部

授業後、素直に自分の気持ちを表出したBさんの思いをどのようにつなげていくのか、次の活動を見直した。自分自身を客観的に捉えたBさんに、今後の委員会活動や行事での教師の関わり方を考えた。また、6年生へのインタビュー計画、縦割り班活動などを関連付けた教育活動を設定した(図3)。

②授業の様子とBさんの変容

関連した教育活動の際は、Bさんの感じ方や考え方に着目し、総則に「学校教育全体を通じてガイダンスとカウンセリングの機能を充実していくことが大切である」と示されているように、Bさんの前向きさや集団を考えた活動などに価値付けをして関わった(コントロール)。

特に大きく変化したのは9月から11月で、クラブ活動と運動会をきっかけに、他学年と好きな活動ができること

やチームのために自分の役割を果たすことにやりがいを見つけることができた。これらの経験を通して自分の委員会だけでなく他の委員会の活動にも参加する姿勢を見せるようになった。12月に行った大きくくりな振り返りにも表れている(図4)。その後の道徳科の授業でも、「縦割り班活動や委員会、係など、面倒くさがらずにまずは楽しみながらやってみるといいのではないか」と自分の経験に触れながら前向きな思いをもっていた。今回の検証から、年間を見通した教育活動を計画し、要所で児童の活動を価値付けしていくことが大切だと感じた。

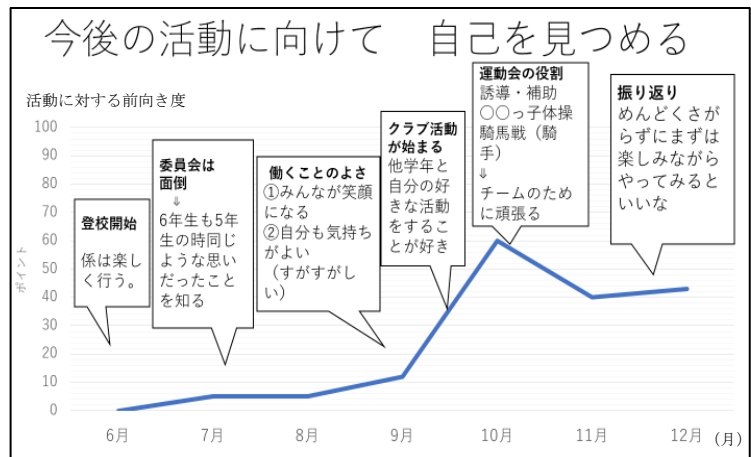


図4 Bさんの振り返りのグラフ

(3) 中学校1年生 自分を客観的に見ることができたCさん

①Cさんの実態とつながりのある道徳教育の構想

Cさんは、コミュニケーションが苦手で、自分に自信がもてない様子が見られた。学校生活も気分によって左右され、不安定な日々を送っていた。学年の実態も、自己有用感の低さが気になるため、めざす生徒像を「自分と向き合い、個性を理解し大切にできる生徒」「信頼関係を基盤とし、互いに高め合う人間関係を作れる生徒」と設定した。

関連図の中に、ユニット学習(今回は2つの内容項目を関連付けた学習)を設定することで、生徒自身が事前につながりを意識し、考えを深められるよう工夫した(図5)。学級活動や行事等を行う前に、「なぜこれらを行うのか」、「どのように成長してほしいか」を意図的

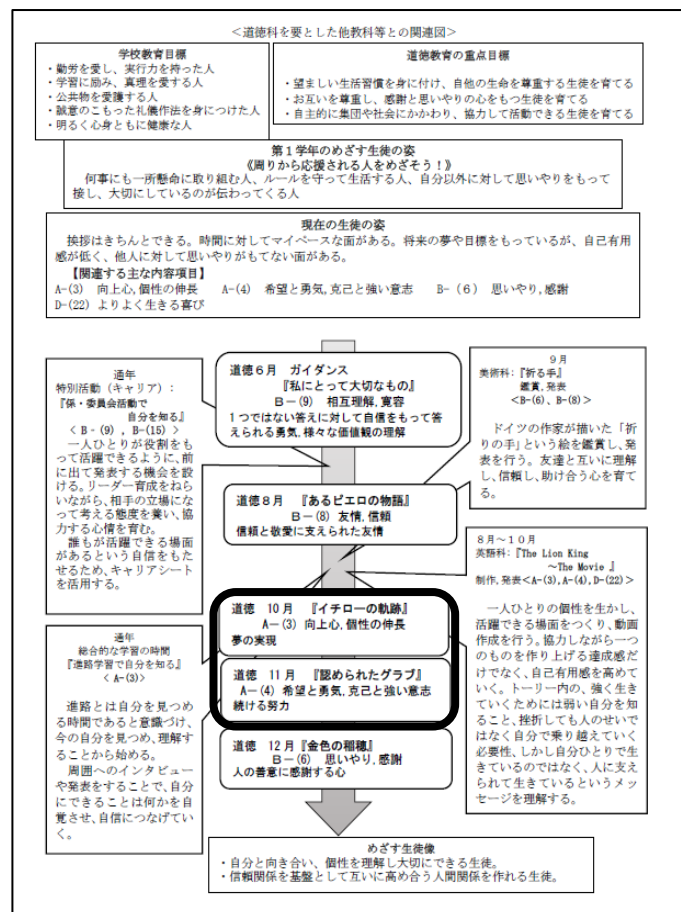


図5 中学校1年生 道徳科を要とした他教科等との関連図

に伝えた。また、ユニット学習のテーマを「夢の実現のために」とし、2回の授業を通して考えていくことを伝えた。ユニット学習①「向上心、個性の伸長」の導入では、総合的な学習の時間で行った職業についての学びと関連させた(モニタリング)。展開では自分の長所と短所を見つめる時間とし、短所を長所に変えるリフレーミングを行った(モニタリング、コントロール)。終末では、ユニット学習②の予告をし、次回への見通しをもたせた。

ユニット学習②「希望と勇気, 克己と強い意志」の導入では、前回の授業を想起させる投げかけをした(モニタリング)。問題解決的な学習で授業を進め、前回との授業を関連付けながら自分と向き合う手段として、ユニット学習①②のワークシートを見開きで作成した。登場人物の生き方から学んだことを班で意見交換した後、今後の自分に生かしていけることは何かを考え、一人一枚短冊に記入し、廊下に掲示した。

②授業の様子とCさんの変容

ユニット学習を終えて振り返りの時間をとった(モニタリング、コントロール)。自分の書いたユニット学習①②ワークシートを見ながらCさんは、「得意なことは継続したいけど、自分に向かないことにこだわってはい、先に進めない。」と考えていた。これは自分のことを俯瞰して見つめ、理解していると見取った。そこには、完璧をめざすのは困難であるという訴えが含まれていると感じた。一人一人が抱える個々の課題を受け止めながら、その解決に向けて教師がどのように関わっていくか、Cさんの振り返りから生徒理解につながる見取りができた。生徒は、その時々を思いを道徳科で表出する。それを蓄積し、自分を客観的に見つめる機会を設定していくことで、生き方の課題を考えながら思いや願いを深め、Cさんの納得のいく方向に進むことができるように教育活動を考える必要があると感じた。

表5 ユニット学習「夢の実現のために」 Cさんのワークシートの記述

ユニット学習①教材「イチローの軌跡」	短所のみを記入し、自分に長所はないと発言。感想には「とりあえず生きていればいい」と記入。
ユニット学習②教材「認められたグラフ」	グラフ職人の〇〇さんは、困難を楽しめる人だ。
廊下掲示用の短冊	悔しいなどという気持ちをバネにして挑戦し続ける。
ユニット①②の振り返り	諦めること。その夢がまず叶わぬことならば諦める。実現できるならすればいい。つまらない人生と全てを諦めない人生は嫌だ。
関連させた教育活動後の大きくくりな振り返り	ユニット学習②の「認められたグラフ」では困難を楽しむことで一つのことを続けていけると感じ取れた。自分は数学なら続けて勉強ができる。美術「祈りの手」の学習で、友のために働き、その友のために勉強を頑張るという友情を感じ取れた。自分は人のために動けないからすごいと思えた。係・委員会活動では、人のために動けないけど、係活動を通して仕事をする中で、人の役に立てているような感覚を感じた。 面倒くさがりな自分だが、面倒や辛いことを通ることが一番の近道で、それを乗り越えた人達には敵わない。自分は人のために動けるように努力している。人のためなら面倒なことでもこなせる気がする。

(4) 中学校2年生 自分を変えたいと前向きに考え始めたDさん

①Dさんの実態とつながりのある道徳教育の構想

本校は活発な生徒が多く、興味のある物事は意欲的に取り組むことができる。一方、我慢が必要なことや、自分を律することは苦手な傾向も見られる。そこで、生徒の多くが意欲的な学校行事と道徳科を関連付けることで、より効果的な働きかけができると考えた。図6のように、掲示物コンクール、体育祭の後に道徳科①(モニタリング)を行い、合唱コンクールと大縄フェスティバル(コントロール)後に道徳科②(モニタリング)を行った。その後、年度途中の大きくくりな振り返りをワークシートに書き、自分の「心の成長」をグラフに表した。グラフは、関連図に示されている「めざす生徒像」にどれだけ近づけているかが見取れるようにした。

②授業の様子とDさんの変容

「自主、自律、自由と責任」を主題とした道徳科①で、Dさんは「自由」や「責任」についての大切さや、自分で決定することの意義について深い考えをもっていた。しかし、現在の自分はやるべきことができず、自律できていないとも述べており、理想と現実のギャップが感じられた。その後に行われた合唱コンクールでは、自分が思う通りに動いてくれなかった友達の姿に「自分は今までどうだっただろう」と見つめ直し、クラスのありのままを受け止めようと思い始めた心の変化を記していた。皆の努力を感じながらともに最後まで練習し続け、達成感を味わうことができていた。その後の道徳科②では、偉人の生き方やクラスメートの意見に触れ、「何かのために努力している人は輝いている。」と述べている。さらに「目標をもっていない今の自分が恥ずかしい。夢中になれる何かを見つきたい。」と、自分の課題を自覚しながら、前向きに自分を変えたいという意志が感じられる記述もあった。二つの道徳科

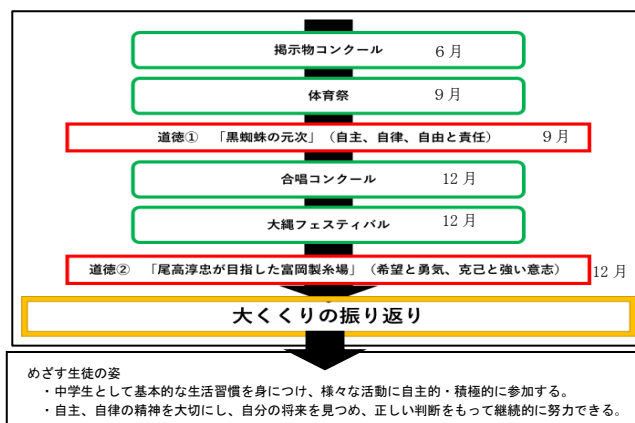


図6 中学校2年生 道徳科を要とした他教科等との関連図の一部

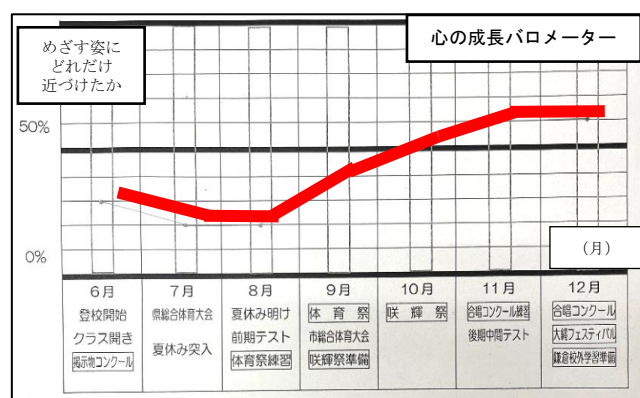


図7 Dさんのグラフ

授業と行事を振り返ると、「わかっているけど、やらない」という考え方から、「できていないから、自分を変えたい」という思いへと変化していることが見て取れた。さらに、大きくりな振り返りにおいても、「これまでの自分はどうだっただろう」と俯瞰して自らを見つめる内容や、「理想とは違っても、それを受け入れ頑張りたい」など、客観的に捉えながら前向きに進もうという意志が感じられるものもあった。「心の成長」を表したグラフ(図7)は、ゆるやかではあるが6月から12月にかけて上昇しており、葛藤と成長がともにみられるものであった。Dさん以外の生徒に関しても、「心の成長」を表すグラフは全体的に上昇している。道徳科の授業で学んだからとはっきり言葉にはしないまでも、行事での経験を踏まえた意見や、授業で考えたことを活かした前向きな意見が多く見られた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 道徳教育の充実について

つながりのある道徳教育を計画し実行することで、児童生徒は自分の生活や行動を振り返りながら、次の活動でその思いや願いを行動にしたり、実現に向けて進む自分を肯定的に捉えたりしていた。道徳科を要とした他教科等との関連図は、道徳教育で作成する「全体計画 別葉」にもっと焦点を当てた取り組みとも言える。教師が教育活動の関連を意識すると、教科指導はもちろん、日常の学校生活でもどのように声をかけるか、思いを巡らすことになる。それは、児童生徒一人一人の実態を踏まえて意欲をもたせ、思いや願いを実現する喜びを感じさせることにつながる。

道徳科・道徳教育は、「急がば回れ」とよく例えられているが、意図的・計画的な教育プランがあってこそだと考える。各教科等の指導を含めて学校教育全体を通して情意や態度等に関わる資質・能力

を育ててきた学校教育をさらに充実させるためには意図的・計画的な教育活動を設定していくことが重要であることが分かった。

（２）児童生徒のメタ認知に関わる力を生かす取組について

メタ認知に関わる力を生かすことは、「自分は今何を感じ、どう考えたのか」を客観的に見つめることになり、道徳科にとって大切な学習活動がより効果的になった。教師にとっては、一人一人の学びを把握し、道徳性を養うために児童生徒のメタ認知をもとにして実態にあった適切な関わりができた。

自分の考えに偏りがあったり、その時の状況に応じて判断した結果が異なったりすることは、児童生徒も教師も生活をしていく中で起こりうることである。そのときの自分の感じ方や考え方がどうだったのかを客観的に見ることで、次に同じようなことが起こったときに、自分の振る舞い方や他者への関わり方が変わってくる。小学校１年生でも「幼稚園の頃より優しくなった」と感じる事ができた児童は、自分以外の人にも優しくなっていた。この事実が物語ることは、教師や友達に価値付けられた思いや願いは、自分の道徳的価値観として築いていくことできるということである。それができる道徳教育の果たすべき役割は大きい。

２ 今後の課題

（１）児童生徒が学んだ意義を実感するために

中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（令和３年１月２６日）には、「全ての子供たちの知・徳・体を一体的に育むため、これまで日本型学校教育が果たしてきた（中略）②社会の形成者としての全人的な発達・成長の保障（中略）を学校教育の本質的な役割として重視し、これを継承していくことが必要である」と示されている。道徳教育は人格形成の根幹に関わるものとして、児童生徒の生活面、学習面の全てに関与する。児童生徒が自分の成長を実感するためには、様々な角度から成長を促す取組が考えられる。今回の研究はその一端であり、見取りの方法も多様な方法を検討する必要がある。個人の思いや願いの達成度は、数値では図れない。だからこそ一人一人を見取り、集団と個人に対応していく教師の関わりがますます重要になる。

（２）学校独自の道徳教育の展開

道徳教育は学校が独自に目標や重点を決めなければならない。指導する機会や時期の計画等を学校が独自に作成しなければならない。作成している学校が多いにもかかわらず、それを関連付け、児童生徒一人一人を見取って指導に生かすことが難しい現実がある。しかし学習の場でもあり生活の場でもある学校において、生き方の課題を考え、自己実現に向けて進むという思いや願いを深めるには、道徳的行為の実践の場である学校教育全体を通じて行う道徳教育が欠かせない。教職員の共通理解を得て実効性のあるものにするため、いかに学校独自の道徳教育を展開するかが課題である。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究を支援していただいた研究員所属校の校長先生並びに教職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

【参考文献】

- | | | |
|--|--------|-------|
| 三宮真智子『メタ認知』学習力を支える高次認知機能 | 北大路書房 | 2018年 |
| 三宮真智子『メタ認知で<学ぶ力>を高める』認知心理学が解き明かす効果的学習法 | 北大路書房 | 2018年 |
| 道徳教育 11月号 NO.749 | 明治図書出版 | 2020年 |